

## 第5回 知的財産戦略ビジョンに関する専門調査会 議事要旨

1. 日 時 : 平成30年4月20日(金) 11:00~13:00

2. 場 所 : 中央合同庁舎4号館 共用108会議室

3. 出席者 :

(専門調査会委員)

安宅 和人	ヤフー株式会社 チーフストラテジーオフィサー
池田 祥護	学校法人新潟総合学院理事長/日本青年会議所 2018 年度会頭
梅澤 高明	A.T. カーニー株式会社 日本法人会長
川上 量生	カドカワ株式会社 代表取締役社長【本部員】
原山 優子	総合科学技術・イノベーション会議専門委員【本部員】
渡部 俊也	東京大学 政策ビジョン研究センター 教授
吉村 隆	日本経済団体連合会 産業技術本部長 (日覚昭廣委員代理)

(内閣府)

山下 雄平	内閣府大臣政務官 (知的財産戦略担当)
吉川 和身	内閣府科技部局 企画官
住田 孝之	知的財産戦略推進事務局長
川嶋 貴樹	同 次長
永山 裕二	同 次長
小野寺 修	同 参事官
岸本 織江	同 参事官
仁科 雅弘	同 参事官
北神 裕	同 企画官 他

(経済産業省)

津幡 貴生 特許庁総務部総務課 企画調査官

4. 議事

開会 山下内閣府大臣政務官

議事

- (1) 知的財産戦略ビジョン素案第1章~第3章について
- (2) 知的財産戦略ビジョン素案第4章~第5章について
- (3) 知的財産戦略ビジョンが目指すべき姿について
- (4) 全体について

閉会 住田知的財産戦略推進事務局長

5. 配布資料

資料1 : 知的財産戦略ビジョン(素案)の目次

資料2 : 今後のスケジュール

## 6. 議事概要

### (1) 知的財産戦略ビジョン素案第1章～第3章について

机上配布した知的財産戦略ビジョン（素案）の第1章～第3章について、事務局より説明を行った後、意見交換を行った。出席者による主な意見等は次のとおり。（必ずしも発言順ではない）

（メッセージ性を出す、サマリーを作る）

- これまで議論してきたことを整理し、全体のロジックが通るようになったが、一方で、その作業をやればやるほど話が複雑になり、項目も多く、包括的ではあるが焦点が見えづらく、メッセージ性が弱くなるというジレンマに陥ってしまう。
- 平たくなり、言いたいことが実質的には入っていても見えづらくなり、読者に読み取ってもらえることになってしまう。
- 例えば大きな変革のテーマを3つに決めて、そのテーマに沿って具体的にどのような施策を打っていくのかというまとめ方をするとメッセージ性がクリアになり、多くの人が理解できるのではないか。
- メッセージを明確にするのは賛成ではあるが、いくつかのテーマで構成し直すのではなく、この構成はそのまま残したほうがいいのではないか。そして、最終的に「〇〇立国」というところにつなげていけばよい。
- 「はじめに」の前に「エグゼクティブサマリー」を作り、これがメッセージだ、これが目指すところだ、というのを初めに言うのがよいのではないか。
- このままでロジックは通っているが、ところどころに、どうしてこれが問題なのか、世界ではこういうことが言われている、などの情報を少しずつ「ボックス」にして埋め込むというのも1つの手ではないか。
- 現状認識や今の知財の置かれた状況に関する考えなければいけない必要なことはまとまっている。足りないのはメッセージだが、有識者の意見も多様で、必ずしも合意ができていないので、ここの中から選ぶというのがよい。
- 例えば1つ目は共有経済、利用を中心とする社会という側面。2つ目は脱平均というキーワード。これらはコンセンサスが取れているのではないか。3つ目を加えれば、つくる人をつくる、一億総クリエイター化のようなものがよいのではないか。
- 今もシェアリングや脱平均というのが意識された書き方になっている。逆に、未来はこの3つだぞと言ってしまふのが本当によいのか。余り決めつけ過ぎず、価値包摂型の社会だから個人が輝けるというサマリーになるのではないか。
- 多様な価値観を包摂する社会というところに一番時間をかけて議論をしたので、それぞれの人がこの中からどのメッセージを選ぶかというのがあってよいのではないか。
- 逆に、いろいろなものが選べるビジョンであるということが、まさに未来を象徴していて、いろいろな価値観があるのだからそれぞれ取りたいところを取るのによいのではないか。
- メッセージ性について、今の社会では見るのはタイトルだけであり、タイトルさえ良ければ読んでもらえるので、世の中へのメッセージを1点に絞り、目立つタイトルを考えるのが良いのではないか。
- この報告書に書かれたようなことを全然知らない20代から40代の中小企業経営者が

多いので、その方たちにとって目を通す価値が大いにある。一方、サマリーがなくて入りにくいので、わかりやすい形で提供するのが大事である。

(よりよい未来を作る)

- 第2章に兆候から予想される将来像が書いてあるが、客観的な予測だけではなく、よりよい未来や望ましくない未来という議論をした。この文章は必ずしもよりよい未来と望ましくない未来を峻別していないが、よく読むとそういう価値観が入っている。
- 今回の議論は世界情勢が影響している。世界的に見ると今は利己的な方向というのが懸念されるからこそ、よりよい未来を選択したいという議論をし、多様性の包含などリベラルな内容になっているのではないか。
- 第2章の4のところに「未来」の相反性というセクションがあって、そこを出発点としてどちらに向きたいかということを使うべきではないか。
- 私たちは未来を作りたいという話をはっきり言った方がよい。私たちは本当に人類に誇るべき未来をつくる国でありたいという議論をしていたし、そのための知財の議論であり、イノベーションが果てしなく生まれる国になるのだという話をしてきた。20世紀後半は、カメラ、車、時計、AV機器など、あらゆるところで、日本は人類にとって素敵な未来をつくった国であった。ここ数十年間は、ほとんど世界を革新していなかったのだから、このように崩壊に向かっている。我々はもう一度、素敵な未来をつくる国になるという話をしたということと、それを実現するために夢と技術とデザインを掛け合わせて未来をつくるという議論をしたので、それをしっかり記述するのがよい。それに向けてボトルネックを取り払うということであり、若い異質な情熱、才能を解き放つということであり、境界や異質領域をどんどん仕掛けるということであり、国力に見合ったリソースを投下するということと言える。
- 「知財立国」は、知財の創造、保護、活用という手段であり、その手段で経済発展するという考え方であった。今ここでの議論は、その手段をよりよい未来のために使わないといけない、その未来はどのような未来か、というコンテキストが新しい。
- 知財を創造したり活用したりというのは手段であり、だから知財立国というのはずっと手段で来ていた。今回は、よりよい未来のために知財をどう構想するのか、という上位の議論をしたのだというのが特徴ではないか。

(目指すべき姿)

- 「〇〇立国」には違和感がある。グローバル世界の中で日本をどうするのかというときに、国そのものの話なのか、それとも国の中でみんなが活躍する話なのか、「立てる国」というのがこの議論に一番フィットした名称なのか、疑問である。
- 新しい未来の知財における価値創造はどのようなのかということが全体のテーマであるが、価値創造という言葉は使い古されているので、「価値創造」ではなくて「価値定義」というのはどうか。AI時代には基本的に知財はAIが作り、質・量ともAIに人間は勝てない。人間に残された価値創造とは、結局、何に価値があるのかを決めて定義することである。
- もともと価値創造とは価値定義である。美術品などはそうである。基本的にこれがいなのだということを定義して、それが価値を生んでいるというのが知財の最も基本的

な性質であり、AI 時代にはそれがより鮮明にはっきりする。

- 「価値定義」や「価値構想」という言葉にシンパシーを感じるが、それぞれ定義をす  
ると言っているだけで、何と言わない。そこがこれからの面白味ということなのでは  
ないか。
- これまでにない価値というものをこれから作っていくというだけではなくて、捨てるこ  
とも大事なので「価値発掘」というものもある。

#### (現状認識の追加)

- 現状認識の部分がもう少しあった方がよい。日本国の大学の競争力が急激に低下し、  
論文の被引用のシェアが落ち、韓国にも抜かれそうである。待遇も研究費もなく、大  
学の競争力がない。博士課程を取るためにこの国では多くのコストがかかり、このよ  
うな状況ではB級の人材しか残らない。この国は知財が枯渇し、崩壊に向かっている  
という認識があった方がよい。リソース投下は、日本とほかの国の R&D 予算の推移を  
見ると、米中が圧倒していて、日本はこの何十年間は全くほぼ同じである。アメリカ  
では企業レベルでも日本国レベルの投下をしている。  
この最大の理由は、私たちは過去に投資し続けており、政府予算の多くが老人及び過  
去の借金返済に使われているからである。これでは投資すべきものに投資されず未来  
はないので、未来に投資するということを我々は意識として持ったほうがよい。  
今は抽象的なビジョンが書かれているので、これに加えて、現実はこのようになって  
いるという衝撃的なインパクトを世に伝えた上で、今書かれていることを伝えること  
が大切なのではないか。

#### (ビフォーアフターを示す)

- 第3章について、結局これは何を言っているのかという話をビフォーアフター的に対  
比する、つまり、これまではこうだったけれども、今後はこうするのだというキーワ  
ードが並んでいるような、対比的なものを1枚入れるとよい。
- 我々は何を生み出すのかという点について、第2回会合の整理（第3回会合資料1-  
3）にある絵がよくできているが、結局、我々はシステムとしてこのように改変する  
ということを宣言しているのではないか。
- アフターの絵はほとんどできているので、ビフォーの絵だけ入れればよいのではない  
か。

#### (アウトプットについて)

- ビジョンなので、2030年のための施策を今すぐやるということではなく、基本的な考  
え方をちゃんとピン止めした上で、新しくよりよい未来の選択を考えるというアプロ  
ーチはよい。
- よりよい未来についての議論が継続的になされる場を作るとともに、それを毎年の知  
財計画、特に2020年に至るまでの毎年の知財計画に何らかの形で少しずつ落としてい  
くという構造にするのがよい。その中でよりよい未来の実現のために民間、大学ある  
いは政府が何をしたらいいのかということを落としていけるような仕組みにつながっ  
ていくとよい。
- アウトプットとして、正しくてなるべく多くの人がそうかもねと言ってくれるものに

したいのか、それとも我々は変化を生み出したいのか、いずれだろうか。

- 変化を生み出したいが、変化を生み出すためには社会的に多くの人がそうだねと言わないと変化は生まれない。多くの人がそうだねと言いながら、かつ、多様であるものを目指すというのが今回の悩ましく難しいところであり、実はここで議論された未来というのは、そのような未来なのではないか。

## (2) 知的財産戦略ビジョン素案第4章～第5章について

机上配布した知的財産戦略ビジョン（素案）の第4章～第5章について、事務局より説明を行った後、意見交換を行った。出席者による主な意見等は次のとおり。（必ずしも発言順ではない）

### (第4章、日本の特徴について)

- 「日本の特徴」は、気をつけないと自己満足的になるところがある。中には、これまではそう言われていたがという部分もあり、現実を見ると必ずしも価値観が共有されていないところもある。つい先日の国際会合で外国の日本通の人たちが、ここに記述されているような点で日本はすばらしいとの話をしていたが、今日の若者や社会を見ると、必ずしもこの価値観で生きている人ばかりではないと回答した。
- 「日本の特徴」に記述されている点にはそれぞれ二面性があり、これまでは社会・経済制度に補完していたから有効であったが、今のように激変した世界観では、必ずしもよい方向にいかない。例えば、中には「均質性」が含まれており、これは変えていく方がよい。このようなことを踏まえた上で、これからのアクションを検討する必要がある。
- 日本の価値観が海外から評価されているということは入れた方がよい。これを使わない手はない。これから日本の広い意味での知的財産、クールジャパンも含めた知的財産を使っていくという意味では、ここは狙いどころであり、売りではないか。
- この章のタイトルを今の議論を踏まえたものに変えた方がよい。
- 本当に「日本の特徴」がこれからも続くのかという視点もあったほうがいいのか。日本の視点、日本の特性はあるが、本当は日本の特徴ではなくてアジアの特徴、アジアの民族の特徴であるものも多い。つまり、日本が西洋社会で最初に出たアジアの先進国だったから、まるでそれが日本の特徴かのようにメリットを出した部分があったが、今後は例えばクールジャパンコンテンツと同じようなものが中国などからどんどん出てくる。これからアジアが中心になっていく世の中で、果たして日本がそのポジションを維持してメリットを継続できるのかという問題意識も、ここに付け加えた方がよいのではないか。
- 世界一の少子高齢化先進国というのは違和感がある。他は日本の行動原理やそのような中身のことなのに、これは日本の特徴というより事実に基づく人口構成の話であり、質が違う点が1つだけ入っていて居心地が悪い。
- 3章までは世界共通（ユニバーサル）なので日本の特徴を出すべきという以前の議論があり、日本の比較的伝統的な、世界からリスペクトされている特徴が入っている。高齢化も世界の他の人は使えないので、ネガティブではなく、活用するという視点から書いてある。
- 海外の方から、日本人はロボットに対する違和感を持っていない、例えば医療現場や

福祉で高齢者の介護にロボットを入れることに対して、自分の国は反対されるが、日本はトライできてうらやましいと言われる。そのような点も記述するとよい。

(第5章、今後の取り組みについて)

- さきほどの現状認識の追加は現実に立脚したもののだが、これに対して、改めてこの5章を見てみると、少し能天気である。もう少し理想と現実に対する問題意識というものを織り込んでいかないといけないのではないか。  
日本は敗戦時、米独に比べて15~20年位ものづくりの技術は負けていた。その後、それが得意になったわけではなく、新しい技術革新で世界を変えてきた。日本の問題ではなく、世界で誰も解いたことのない問題を解いて、この国は革新した。東京通信工業(今のソニー)や本田技研等の町工場にはこのような若い秀でた才能がいた。入交さんは零戦を作るつもりで東大の航空学科に行ったが、敗戦したのでF1を作るような天才だった。  
このようなことができる国だというのが我々の本当の元々の強さであり、このような才能を解き放つということが重要である。日本はこのように変わってきたのだということをもう一回、呼び起こすとよいのではないか。
- 「課題解決=課題×技術×デザイン」という式について、世界は当たり前でこれに戦っているのに、日本は今からここを頑張ろうとしなければいけないということを入れるべき。「イノベーション=」や「未来=」でもよい。

(大学の役割、ベンチャー、新陳代謝)

- 戦後この国がこんなに強くなったのは、地方国立大学が相当強かったからというのは大きい。それなりのレベルの研究をやっているところが相当量存在するのはとても重大で、なおかつ流行の研究だけではないところが大事である。
- 未来をつくるということは、今の領域が掛け合わさって未来の新しい領域を生み出すということで、拠点がたくさんあるということや、今の領域を超えてかけ合わさったものを意図的に生み出していき、新しい産業や学問分野を生むことが大事である。
- 今、日本の大学の教員は希望を失いつつある。東大、京大レベルでも教員は厳しく、地方大学ではもはや教員の補充もできないという状況にあり、日本の国力を未来永劫に削ぐ可能性があり、何らかの形でくさびを打つという表明が大事ではないか。
- 先ほどの夢、技術、デザインの掛け合せの社会実験をしなければいけないが、大学の役割として、そのような実験を試みる場として位置づけるというのも入れるべき。
- ミッションのためにいろいろなことに挑戦して失敗しても大丈夫というのが許容される場として大学をもう一度再定義するというのもどこかに書かれているとよい。
- 境界領域については、米国を見ると、大学に研究テーマを提供しているのはベンチャーであり、ベンチャーが有望領域を作ってきている。一方、日本の場合は、ベンチャーがうまく起きず育たず、そのようなダイナミクスが余りない。
- 2030年まで、日本はベンチャーをどれだけ活発にするかということがとても大切であり、実はここに伸びしろがある。この先10年間を考えると、これはしっかりと書くべき点ではないか。
- 境界領域や多様な構想、ここで言うデザインや包摂的なもの、そしてよりよい未来のための選択の中で、SDGsというのは重要になってくるが、今学生を見ているとSDGsに

- 関心があり、これでベンチャーを立ち上げようという者がいっぱいいる。
- 報告書を改めて見直すと、「新陳代謝」を促進することが明示的に書かれていない。産業界も社会も労働市場も、いろいろな意味で流動性を高めて新陳代謝を促進することが、結果的にとがったアイデアが育って、世に出て、価値になるという話を書くべき。
  - 規制が多くの挑戦を拒み、かなりのチャンスを破壊していることは間違いない。そのため、それを革新的に調整する、あるいはむしろ促進すること、せっかくの多くの挑戦を邪魔しないということを、どこかに入れておいた方がよい。

(言葉の使い方の整理、「デザイン」、「プラットフォーム」)

- 「デザイン」という言葉は、単にプロダクトデザインの話ではなく、どのような構想を持ってビジネスをやるかという「デザイン思考」もあるし、よりよい未来を選択するためのデザインは知財につながるし、重要なキーワードなので整理すべき。「デザイン」は、経産省と特許庁の別の委員会で検討していて、そこでの定義は、従来からあったブランド構築のためのデザインに加えて、イノベーションのツールとしてのデザインが重要になっていて、これが車の両輪であるとなっている。そのため、イノベーションのツールとしてデザインをどう活用するかというデザイン思考的な活用のところを国として、あるいは日本の産業界としてもっと押さなければいけないというメッセージを出そうとしているので、ニュアンスを統一するとよい。
- 「プラットフォーム」の言葉も、便利な言葉で、多くの役所の文書に出てくるが、中身がもう少しわかりやすいような書き方をしてもらいたい。情報収集なのかコンソーシアムなのか、市場を作るのかなど、具体的に何かというのがつかめない。

(3) 知的財産戦略ビジョンが目指すべき姿について

知的財産戦略ビジョンが目指すべき姿について、事務局より説明を行った後、意見交換を行った。出席者による主な意見等は次のとおり。(必ずしも発言順ではない)

(目指すべき姿について、「価値定義立国」(仮))

- 先ほど「立国」に違和感があるという話があったが、立国の代わりに「社会」と置いたらどのようなキーワードがあるかという観点で見ると膨らむのではないか。科学技術基本計画では「Society 5.0」としているのだから「社会」である。
- これから脱皮するというメッセージを強くするのがよい。キーワードは、「価値」というのが相当あったのと、今日は「デザイン」が多く入っていたし、「成長的撤退」というのはネガティブだが、「新陳代謝」を高めると感じられるものがよい。
- 「価値定義」という提案は、単純に目次の中で最も出てくるキーワードが「価値創造」であり、それを目立つように言い変えたのが「価値定義」である。
- 候補の中には、いろいろな刺激的で重要なワードがあるが、ビジョン全体をあらわしていて、この資料から読み解けるようなキーワードは少ない。そのため価値創造が最も無難であるが、価値創造だと余りに陳腐で、インパクトもない。
- 「価値構想」や「価値定義」というのは本当によい。精神としては「価値定義」で基本的に合意である。一方、「価値定義立国」でどのぐらい一般の人に刺さるのかが今一つわからない。心をそこに残したまま刺さりがよくならないかと考えて、例えば、「価

値刷新」や「価値ドライブ立国」、あるいは「アップデート立国」はどうか。

- 今日日本で重要なのは観光産業であり、日本はいいぞと外国人に思われることである。本当に根拠があるかというより、言い切ること、つまり定義することが重要である。クールジャパン政策は、客を集めるためなので、自己満足するのではなく、外国人がそう思う定義が重要。
- 実際にみんなが本当に価値の定義というものを信じるかどうかということが、今までの世の中の価値創造というものの本質である。その部分を強調するというのは、それなりに新鮮な切り口になるのではないか。
- 単純に「価値を定義する」と言われると、そのような言い方は余りしないので、そこがひっかかって目立つ要素になるし、それなりの合理的な説明も可能である。
- 生産財としての富は、AI やロボットで自動化されるので、あらゆるものの価値が下がる。本当に価値があるものは、人間が決めるしかない。根拠のあることはAI が大量生産してしまうので、歴史や人間らしさに価値があるなど、根拠のないことに逃げる。
- 思いついただけの「構想」では弱くて、決めてしまうというところまで行く「定義」がよいか。

(英語に訳せる言葉がよい)

- もう一点、条件づけたいのは英語に訳せる言葉にしてほしい。今、日本でこのような議論をして、メッセージとしてこれからのビジョンとして発信したときに、訳しづらいものでは伝わらない。
- バリュー・クリエーションと言ったら平たくなり過ぎてしまう。知財というのはバリュー・クリエーションなので、本質的に何も言っておらず、そもそもバリュー・クリエーション自体も何も言っていないに等しい。
- 昔「ディスカバー・ジャパン」というのがあった。それになぞって「ディスカバー・バリュー」というのも悪くないのではないか。

(「価値デザイン社会」に決定)

- 今議論している「定義」というのは、「デザイン」に近いのではないか。「価値定義」と言われたときに、世の中にわからないので、もう少し普通の人も使えそうな言葉で言うと、「価値デザイン」ということではないか。
- 「定義」と言われると1つに決めるかのように日本人はすぐ考えるのではないか。そうではなくて、いろいろな価値があってよく、いろいろな価値がどんどん出てくるようなイメージにしたい。
- 「価値デザイン」は、構想して、生み出して、それを広めていく、ということまで多義的に含められる。当然、定義というニュアンスも含められる。デザインだからどんどん生み出すみたいなのもできるのではないか。
- 「価値をデザインする社会」。「デザイン」であれば「立国」より「社会」のほうがよい。
- 「構想」より「デザイン」の方が広くてよい。アーティスティックな部分も入るし、日本的なセンスの良さも入る。



（「価値デザイン社会」の説明）

- 内容が決まったのだったら、価値をデザインする社会とはどのようなことかという説明を冒頭につけるのがよいのではないか。それは、今議論したような内容がその中に入っていれば、それでよいのではないか。
- 価値デザインの例として、幾つかわかりやすい、しかし違うパターンのもを書けると、なるほど、そのようなことをみんなでやっていく社会なのだと、割と納得感があるかもしれない。
- システムとして刷新するのだという強い意志を明示的にどこかで書く方がよい。価値創造エコシステムの図（第3回会合資料1-3）を、価値デザイン社会と書いて、もう少し単純化して、より具体性を持たせて書いて、可視化ができるとよい。

（その他）

- これから2030年ぐらいまでを目指すと2つ重要なことがある。デジタルトランスフォーメーションのような先端技術がIT中心に進歩する話と、SDGsのような国際的にいいねと思われているものへ向けた話である。
- SDGsは、日本のこれまでの倫理観から考えると当たり前で、日本がもともとやってきた話であり、自分たちの強みになる。日本は、このことを価値観として発信し、もう少し国際的な議論をリードできるようなポジションに、本当はいるのではないか。
- このような議論を継続的にやっていくことは意味がある。多くの委員の方からも、特定の事柄にとらわれない未来をしっかりと議論するということは必要であるとの意見があった。続けていければ一番ありがたい。

以上